

未就園児を育てる母親の養育態度とソーシャルサポート・ 自己評価の関係

—— 愛着形成の視点から ——

The Relations of Mothers' Parenting Attitudes toward Pre-kindergarten Children,
Social Support, and Self-evaluation.
: from a Viewpoint of Attachment Building

田 並 幸 恵 米 澤 好 史
Sachie TANAMI Yoshifumi YONEZAWA
(海南市立こじか保育所) (和歌山大学教育学部心理学教室)

2018年10月21日受理

要約

本研究では、どのようなソーシャルサポートが、母親の養育態度にどんな影響を与えるかについて検証することを目的として、未就園児を育てている母親105名を対象に質問紙でアンケート調査を行った。

中道・中澤(2003)の親の養育態度尺度、堤・堤・折口・高木・詫摩・萱場・五十嵐(1994)、堤・萱場・石川・菊尾・松尾・詫摩(2000)の地域住民用ソーシャル・サポート尺度を修正したもの、田邊・米澤(2009)の自己評価尺度の3尺度を用いた。人から情緒的なサポートをされると、こどもに「応答的」な対応ができるが、具体的サポートはこどもへの「統制的」なかかわりにつながりやすいことが示された。

「応答性」には、全ての情緒的サポートが影響しており、「統制」には影響していないことから、人から情緒的サポートされると、人は応答的な対応ができる。「統制」には自己効力感のみが影響していることから、自分だけで子育てができると考える人は、自分だけに閉じられた子育てをしやすいということが言える。また、応答性の高い母親は、こどもとの愛着形成が結びやすく、統制の高い母親は、こどもとの関係性に課題をもつ可能性が示唆された。

キーワード：子育て支援、ソーシャルサポート、養育態度、愛着

I. 問題と目的

母親には、気持ちいいほど明るいお母さん、悩みごとがあるのかなと、見ていて心配になるお母さん、友達と一緒に楽しそうなお母さんなど、タイプが複数ある。一見、子育てに余裕があるように見えても、実は悩みを抱えていたり、大変そうに見えても、こちらの思い過ごしだったりすることが、話を聞いていると見えてくる。

筆頭筆者は、月に数回地域の公民館で未就園のこどもと母親に向けたプレ幼稚園のような保育を行っている。

保育が始まると、親子で楽しむ、泣き出すこどもをあやしながら参加する、こどもが積極的に遊び、親が見守るように参加するなど、参加スタイルは様々である。

こどもが泣き止まず、たまりかねて帰ろうとする母親がいるが、泣くから帰るのではなく、泣いた時に、一度輪から抜けて、様子を探ったり別室で気分を変えたりして落ち着いたら、また戻ってきて下さいという

声掛けをすることがある。

それでも、こどもが泣いたりぐずったりしてしまうと、周りに気を使う、母親自身はその対応に疲れるなどの理由からか、途中で帰ってしまうケースもあるが、頑張っただけで最後まで参加してくれた帰りに、「お母さん、大変だったね、お疲れさまでした！」と言って声をかけると、笑顔で泣いていた原因などを話してくれることが多い。

こちらが、「大丈夫ですよ」と伝えても、ぐずる原因をすぐ察知できる母親と、機嫌が直らず帰ることを選択する母親がいて、そんな母親たちには、どんな傾向があるのか、養育態度と自己評価やソーシャルサポートとの関係を明らかにするべく調査を試みた。

厚生労働省「人口動態調査」(2018)によると、平成28年の出生数は、前年より2万8699人減少して、100万人を割る97万6978人であった。また、出生率や合計特殊出生率も、ともに前年より低下している。1947年には4.54だった合計特殊出生率は、1.44にまで低下した。和歌山県は、1.50と、全国平均より、やや多い結果で

あった。

これに比べて、死亡数は増加し、前年より1万7304人増え、130万7748人で、人口減少や少子化の波は止まらない。

野村(2003)は、「子育てという営みは、長らく、家庭においてなされるものであり、その責任は親に属していると考えられてきた。」とし、「ところが、いわゆる『少子化』の中で、こどもの数が減少することにともない、このような確信とは異なる考え方が提起されてきている。子育ては、家庭のみならず、地域社会を含め、こどもをとりまく社会機関すべてが関わっていくべきだという考え方である(以下省略)」と述べ、このような考え方の背景として、「家庭の子育て機能の低下があるといわれる。そしてその原因としてきまってきたのが『都市化』、『核家族化』、『価値の多様化』というこどもと家庭をとりまく社会変化である。」と述べている。

内閣府による「家族と地域における子育てに関する意識調査」(2014)では、全国の20歳～79歳の男女3000人に対して、層化二段無作為抽出法により、調査員による個別面談聴取を行ったところ、「理想の家族の住まい方」という質問に対し、性別で見ると、「男女とも自身の親との同居を理想とする傾向がみられる。」とされていた。

また、「祖父母の育児や家事の手助け」で、「子どもが小学校に入学するまでの間、子どもから見た祖父母が、育児や家事の手助けをすることが望ましいかどうか」については、性別に大きな男女差はなく、8割前後が「祖父母の手助けを望ましい」と回答した。

「祖父母に期待する手助けの比較」では、多くの項目で祖母への期待が大きい。「保育所・幼稚園等への送迎」、「子どもを入浴させる」と言うような具体的な支援や、教育費やそれ以外への経済的な支援は、祖父に対する期待が大きい。

これらのことから、祖父母からの育児への援助があるのとないのでは、子育ての負担感や孤立感が減ったり、養育態度にもよい影響が出るように考えられるが、一方で、母親は、祖父母と関わりが増えると、自身の思うような育て方ができず、ストレスを感じたり、自分を否定的に捉えてしまうこともあるのではないかと推測する。

荒牧(2005)は、育児への否定的・肯定的感情とソーシャルサポートとの関連についての研究において、同居率やそれによるサポートの多さに関わらず、妻方の親からのサポートが、育児への否定的・肯定的感情と関連がないとの結果を出している。その理由の一つに、「妻方の親から得るサービスとは、母親にとっていわば“当たり前”になっていることが考えられないだろうか。助けてもらうのは“当たり前”だからこそ、母親の育児負担感や不安感などを軽減する効果をもって

いないのかもしれない。」としている。荒牧は、「そばに住んでさえいれば、サポートしてもらえるはずだ」という前提のもと、サポートの多い・少ないが直接母親の心理的な問題と結びつかないもの」と考え、「『サポートを受けていない』イコール『サポートしてもらえない』ではないために、サポートが得られないことへの葛藤が生じない」と述べている。

また、夫のサポートの必要性として、「ひとり親群よりも、夫がいるにも関わらず、サポートを得ることができない群の方が、育児に対する心理的な負荷」が高く、「母親がサポートを得られると期待できる状況下では、それが得られないことが、かえって負担となり、結果的に、育児への負担感・不安感も高まるといえそうである。」と述べている。一番身近なサポート源である夫に、妻は、常々期待しているだけに、サポートを受けられない時のダメージが大きいということがうかがえる。

国の取り組みとして、厚生労働省は、平成13年より「健やか親子21」を開始した。これは、「母子の健康水準を向上させるための様々な取組を、みんなで推進する国民運動計画です。母子保健はすべての子どもが健やかに成長していくうえでの健康づくりの出発点であり、次世代を担う子ども達を健やかに育てるための基盤となります。」と説明されている。

平成27年度からは、現状の課題を踏まえ、新たな計画(～平成36年度)が始まり、「安心して子どもを産み、健やかに育てることの基礎となる少子化対策としての意義に加え、少子化社会において、国民が健康で明るく元気に生活できる社会の実現を図るための国民の健康づくり運動(健康日本21)の一翼を担うものです。」とされている。

母子保健を取り巻く状況には、「少子化の進行」、「晩婚化・晩産化と未婚率の上昇」、「核家族化、育児の孤立化等」、「子どもの貧困」、「母子保健領域における健康格差」(小学生の肥満児の割合、3歳児のむし歯など)がある。

ところが、第1次計画(平成13～26年)で、「十代の自殺率」、「全出生数中の低出生体重児の割合」という2つの指標が悪化した。これにより、平成27年から「健やか親子21」の「第2次」が開始された。

「健やか親子21(第2次)」では、10年後に目指す姿を「すべての子どもが健やかに育つ社会」として、すべての国民が地域や家庭環境等の違いにかかわらず、同じ水準の母子保健サービスが受けられることを目指し、従来の「健やか親子21」で掲げてきた課題を見直し、現在の母子保健を取り巻く状況を踏まえて3つの基盤課題を設定した。

また、特に重点的に取り組む必要のあるものを2つの重点課題とした。基盤課題は、「切れ目のない妊産婦・乳幼児への保健対策」、「学童期・思春期から成人

期に向けた保健対策」、「子どもの健やかな成長を見守り育む地域づくり」、重点課題には、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」、「妊娠期からの児童虐待防止対策」があげられている。

こどもを取り巻く大きな問題の一つに、虐待がある。平成28年12月に厚生労働省から発表された、「平成27年度福祉行政報告例の概況」によると、平成27年度中に児童相談所が対応した養護相談のうち、児童虐待相談の対応件数は103286件で、前年度に比べ14355件(16.1%)増加しており、年々増加している。

被虐待者の年齢別にみると「小学生」が35860件(構成割合34.7%)と最も多く、次いで「3歳～学齢前」が23735件(同23%)、「0～3歳未満」が20324件(同19.7%)となっているが、0歳から学齢期前の、乳幼児期のこどもを合わせると、42%となり、一番大きい割合を占めることになる。さかのぼって平成23年から平成26年までの結果を見ても、おおむね42%となっていてあまり変化がない。

メディアのニュースの中でも、乳幼児の虐待が報道され、非人道的で残忍な内容に耳を覆いたくなる衝動に駆られることが、年々増えている。中には、母親の育児不安や、子育ての孤立が原因で、虐待へとつながってしまうケースもある。

安藤ら(2008)は、幼稚園児の母親の育児感情と抑うつについての研究において、「育児への負担感や育ちへの不安感にはきょうだい数が寄与していた」とし、「きょうだい数が増えることで、実際の育児にかかる手間は増え、また、子ども同士の関係を扱う必要も生じ、母親の負担感は強くなる」と考える。

また、「子どもが2人目の母親は、育児の経験があるから育ちへの不安感は減るが、子育ての負担は増えている。預かり保育の利用にも、出生順位が後であることが寄与していたことから、子どもが2人目の母親に対して、子育て経験者ではあるが、育児への負担感が大きいという点で目を向ける必要がある。」とされている。

この結果から、「幼稚園児をもつ家事専従の母親」についてのもので、今回、本研究の調査対象とした母親たちのこどもは、まだ、集団に属していないため、母親は、24時間365日営業のような子育てをしていることから、育児中心とした生活全般に疲弊しやすかったり、自尊感情が低くなったりしているのではないかと考えた。

本研究では、筆頭筆者は幼稚園教諭を経て、現在、海南省教育委員会生涯学習課子育てひろばで遊戯指導を担当している保育士として、就園前の親子に関わり、また、生活の中での様々な場面で、親が子に関わる様子を見聞きする中で、感じてきた疑問や仮説を検証するため、地域の支援センターを利用している母親を対象に、保育園や幼稚園などの社会に属していないこ

どもを育てている母親の養育態度には、配偶者からのサポート、家族からのサポート、友達からのサポートとソーシャルサポートに自己評価が母親の養育態度にどのような影響を与えるかについて発達支援の専門的見地から検証する。

和歌山で生まれ育ち、家庭をもった母親と、他府県から嫁ぐ、または引っ越しをしてきた母親では、人的環境も含む環境要因が影響すると仮定し、出身地と、現在の居住地での年数を、フェイスシートの質問項目に入れた。

また、同年代のこどもをもつ母親が、昭和生まれと平成生まれでは、養育態度に差があると仮定し、母親の年齢も同じくフェイスシートの質問項目に入れた。3歳までの乳幼児を育てている母親たちにとって、どんなサポートが、自身の子育てによりよく影響しているかなどを明らかにすることを目的とした。

II. 方法

II-1 被験者

子育て支援センター五月山利用者26名、和歌山信愛女子短期大学内ふれ愛ルーム木のおうち利用者44名、海南省立地域子育て支援センターきらら利用者17名、海南省教育委員会生涯学習課ほっとカフェ利用者8名、その他の支援センター等の利用経験者10名の合計105名(平均年齢33.5歳)を対象に質問紙でアンケート調査を行った。

尺度によっては、何度も同じような質問項目があるため、負担を軽減するためにも、あらかじめ説明し、了承を得ながら配布した。

II-2 質問紙構成

II-2-1. フェイスシート

出身地、現在の地域での居住年数、本人の年齢、家族の構成、こどもの性別と年齢、利用しているサービス(子育て支援に関連するもの)の6項目からなる。

II-2-2. 尺度

・親の養育態度(16項目)

中道・中澤(2003)が作成した、バウムリンド(1967)に基づき養育態度を「応答性」と「統制」の2次元により測定する尺度である。「応答性」は母親とこどものコミュニケーションと養育から成り、「こどもの意図・欲求に気付き、愛情のある言語や身体的表現を用いて、こどもの意図をできる限り充足させようとする行動」、「統制」は養育上の統制と母親の成熟欲求から成り、「こどもの意思とは関係なく、母親がこどもにとって良いと思う行動を決定し、それを強制する行動」と定義される。

・地域住民用ソーシャル・サポート尺度

配偶者用・家族用・友人用、(各17項目、合計51項目) 堤・堤・折口・高木・詫摩・萱場・五十嵐(1994)、堤・

萱場・石川・苜尾・松尾・詫摩(2000)が作成したものである。配偶者・配偶者以外の家族・友人という3種類のサポート源について基本的に同じ項目でサポートの入手可能性をたずねる、それぞれ1因子性の尺度である。

堤らの尺度(堤・萱場らの呼称は「Jichi Medical Schoolソーシャルサポートスケール(JMS-SSS)」)は、一般の地域住民を対象とした調査で用いることを意図して開発された。堤らは公衆衛生学的調査における使用を念頭に作成しているが、心理学者が同様の集団を対象として行う調査での使用にも適していると思われる。なお、堤ら(1994)は尺度作成にあたり、欧米社会で開発された尺度の妥当性が我が国の地域住民にそのままあてはめられるとは限らないことを指摘し、我が国の実情に合わせた内容にすることも考慮している。

本調査において、サポート提供者から望ましいサポートに関する7項目「困っているときに、知っている情報を教えてくれたり、調べてくれたりする。」「あなたに何か困ったことがあって、自分の力ではどうしようもないとき、助けてくれる。」「あなたを助けるために、予定を変更して、協力してくれる。」「困っている時や、悲しんでいるとき、声をかけてくれる。」「どんなことでも安心して話せる。」「あなたの悲しみを我がことのように悲しんでくれる。」「いつでも話を聞いてくれる。」を追加した。

・田邊・米澤(2009)による自己評価尺度(10項目)

本尺度は、ローゼンバーグ(1965)が作成した自尊感情尺度を田邊・米澤(2009)の指摘に従って、自己評価尺度として使用した。

自尊感情とは、人が自分自身についてどのように感じるのかという感じ方のことであり、自己の能力や価値についての評価的な感情や感覚のことである。ローゼンバーグ(1965)は、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情としている。また、自身を「非常に良い(very good)」ではなく「これでよい(good enough)」と感じる程度が自尊感情の高さを示すと考えており、自尊感情が低いということは、自己拒否、自己不満足、自己軽蔑を表し、自己に対する尊敬を欠いているということの意味するとしている。

II-3 実施期間

平成29年11月末~12月20日

III. 結果

III-1 因子分析

III-1-1. 親の養育態度尺度

105名から回答を得た、51項目の回答に対し、親の養育態度尺度については、主因子法による因子分析(バリマックス回転)を行った結果、2因子が得られた。因子

において因子負荷量が.400基準に項目を選んだ(Table 1)。

第1因子は、「子どもが一人で遊んでいて、退屈そうだなと思ったとき、加わって一緒に遊ぶ。」「あなたが家にいる時、ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に過ごす時間を持っている。」「どこかに出かけて、子どもが疲れていると感じた時、休んだり、子どもを抱っこする。」という項目が負荷したので、中道・中澤(2003)同様、「応答性」と名付けた。

第2因子は、「子どもがあなたと決めた約束を守らない時、その約束をもう一度教える。」「図書館や映画館など静かにしなければならない場所では、子どもを静かにさせる。」「子どもが自分のやるべきことをやらない時、『やりなさい』と言う。」という項目が負荷したので、中道・中澤(2003)同様、「統制」と名付けた。

III-1-2. 住民用ソーシャルサポートスケール尺度

ソーシャルサポートスケールについては、全体について主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行い、それぞれの因子において因子負荷量が.400基準に項目を選んだ(Table 2)。堤らと違い、2因子構造がみられた。

第1因子は、「気持ちを通じ合う。」「あなたの悲しみを我がことのように悲しんでくれる。」「困っている

Table 1 親の養育態度に関する因子分析 (主因子法、バリマックス)

	第1因子	第2因子	共通性
子ども一人で遊んでいて、退屈そうだなと思ったとき、加わって一緒に遊ぶ。	.752	-.364	.534
あなたが家にいる時、ボール遊びやゲームなど、子どもと一緒に過ごす時間を持っている。	.643	.082	.373
どこかに出かけて、子どもが疲れていると感じた時、休んだり、子どもを抱っこする。	.513	.235	.373
子どもがイライラしていると思った時、「どうしたの」と聞いてみる。	.461	-.176	.228
子どもを抱きしめたり、やさしい言葉をかけて愛情を示している。	.449	.045	.286
家族で遊びに行く時、親の都合だけでなく、できる限り子どもの行きたいところを取り入れる。	.301	.259	.517
あなたが忙しい時、子どもが遊びたがっている、遊ぶのを後回しにしてしまう。	-.282	-.011	.050
子どもが寝る時間になっても、遊んでいて寝ない時、そのままにしておく	.066	-.063	.006
子どもがあなたと決めた約束を守らない時、その約束をもう一度教える。	.161	.716	.517
図書館や映画館など静かにしなければならない場所では、子どもを静かにさせる。	.208	.551	.354
子どもが自分のやるべきことをやらない時、『やりなさい』と言う。	.017	.430	.180
買い物に行って玩具を買う予定が無い時に、子どもが玩具を欲しいと言って売り場から動かなくても、玩具は買わない。	-.014	.425	.224
子どもが間違った行動をした時、どうしてその行動をしたのか理由を聞き、どうしたらよかったのかを話し合う。	.117	.406	.181
子どもが友達と遊んでいて、友達が使っている玩具を無理やり取ってしまった時、それを返させる。	.071	.268	.238
子どもがあなたに対して悪い言葉遣い(「んぐ」、「アホ」etc)をしたとしても気にしない。	.055	-.224	.045
子どもが自分のやっていることがうまくいわず困っている時、静かにさせる。	.046	.047	.007
寄与率(%)	13.71	8.84	

Table 2 ソーシャルサポート(全体)に関する因子分析 (主因子法、プロマックス)

	第1因子	第2因子	共通性
気持ちが通じ合う。	.877	-.162	.642
あなたの悲しみを我がことのように悲しんでくれる。	.871	-.095	.678
困っている時や、悲しんでいるとき、声をかけてくれる。	.804	-.060	.587
あなたの喜びを我がことのように喜んでくれる。	.786	-.134	.536
いつでも話を聞いてくれる。	.753	.042	.603
どんなことでも安心して話せる。	.718	.049	.556
物事をいろいろよく話し合せて、一緒によりくんで仲やる。	.688	.120	.577
困っているときに、知っている情報を教えてくれたり、調べてくれたりする。	.688	-.097	.410
(配偶者・家族・友人がいるので)孤独ではないと思う。	.683	.115	.564
お互いの考えや将来のことなどを話し合うことができる。	.610	.195	.489
(配偶者・家族・友人)に、守られていると感じる。	.560	.296	.581
あなたが何か困ったことがあって、自分の力ではどうしようもないとき、助けてくれる。	.518	.254	.475
あなたが病気で寝込んだときに、身の回りの世話をしてくれる。	-.030	.892	.768
家事をやったり、手伝ったりしてくれる。	-.073	.860	.677
あなたが経済的に困っているときに、頼りになる。	-.111	.841	.619
引越して住まなければならないときに、手伝ってくれる。	-.008	.781	.604
あなたを助けるために、予定を放棄して、協力してくれる。	.297	.453	.439
寄与率(%)	46.67	11.13	

時や、悲しんでいるとき、声をかけてくれる。」という項目が負荷したので、「情緒的サポート」と名付けた。

第2因子は、「あなたが病気で寝込んだときに、身の回りの世話をしてくれる。」「家事をやったり、手伝ったりしてくれる。」「あなたが経済的に困っているときに、頼りになる」という項目が負荷したので、「具体的サポート」と名付けた。

III-1-3. 自己評価尺度

自己評価の尺度については、主因子法による因子分析(プロマックス回転)を行った結果2因子が得られた。因子において因子負荷量が.400基準に項目を選んだ(Table 3)。

第1因子は、「私は何かにつけて役に立たない人間だと思う」、「私は敗北者だと思うことがある」、「私は自分は全くだめな人間だと思うことがある」という項目が負荷したので、田邊・米澤(2009)同様、「自己効力感のなさ」と名付けた。

第2因子は、「私は価値のある人間であると思うことがある」、「私は私でいいのだと思う」、「私は自分に満足している」という項目が負荷したので、田邊・米澤(2009)同様、「自己受容」と名付けた。

Table 3 自己評価に関する因子分析 (主因子法、プロマックス)

	第1因子	第2因子	共通性
私は何かにつけて役に立たない人間だと思う	.980	-.170	.763
私は敗北者だと思うことがある	.708	.092	.430
私は自分は全くだめな人間だと思うことがある	.676	-.152	.619
私は自分自身を尊敬できない	.583	-.268	.624
私は自信できるところがない	.566	-.087	.395
私は価値のある人間であると思うことがある	.017	.790	.607
私は私でいいのだと思う	.029	.755	.540
私は自分に満足している	-.058	.678	.516
私は色々ないいところをもっていると思うことがある	-.144	.674	.607
私は物事をうまくやり遂げることが出来る	.100	.553	.241
寄与率(%)	45.56	7.86	

III-2 相関係数

親の養育態度「応答性」と「統制」、ソーシャルサポート「情緒的サポート」と「具体的サポート」(全体、配偶者、家族、友人)、自己評価尺度「自己効力感のなさ」と「自己受容」の相関係数をTable 4に示した。

「応答性」には、「全体の情緒的サポート」、「全体の具体的サポート」、「配偶者の情緒的サポート」、「配偶者の具体的サポート」、「家族の情緒的サポート」、「家族の具体的サポート」、「友人の情緒的サポート」との間に有意な正の相関があった。

「応答性」と「自己効力感のなさ」との間に有意な負の相関があった。

「統制」と「自己効力感のなさ」の間に有意な負の相関があった。

Table 4 因子別平均値の相関関係

応答性	統制	情緒的サポート(全体)	情緒的サポート(配偶者)	情緒的サポート(家族)	情緒的サポート(友人)	情緒的サポート(友人)	具体的サポート(全体)	具体的サポート(友人)	自己効力感のなさ	自己受容
1	.147	.364**	.266**	.237*	.237*	.237*	.237*	.237*	-.237*	.237*
情緒的サポート(全体)	.142	.000	.006	.002	.017	-.003	-.001	-.006	.541	.001
情緒的サポート(配偶者)	.101	.106	.106	.104	.104	.99	.106	.104	.106	.104
情緒的サポート(家族)	1	-.060	-.041	.040	.063	-.048	-.069	-.118	-.091	-.234**
情緒的サポート(友人)	.553	.682	.694	.631	.642	.606	.241	.369	.004	.562
具体的サポート(全体)	.101	.101	.100	.100	.96	.96	.100	.100	.100	.100
具体的サポート(友人)	1	.727**	.742**	.579**	.810**	.638**	.808**	.476**	-.247*	.197*
自己効力感のなさ	-.000	-.000	-.000	-.000	-.000	-.000	-.000	-.000	.000	.012
自己受容	.106	.104	.104	.99	.99	.106	.104	.106	.104	.104
情緒的サポート(全体)	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000
情緒的サポート(配偶者)	1	.681**	.392**	.373**	.373**	.373**	.320**	-.185	.194*	.048
情緒的サポート(家族)	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000
情緒的サポート(友人)	.104	.104	.99	.99	.99	.104	.104	.104	.104	.104
具体的サポート(全体)	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000
具体的サポート(友人)	1	.324**	.373**	.350**	.350**	.350**	.251**	-.068	.228*	.000
自己効力感のなさ	-.001	-.001	-.000	-.000	-.000	-.000	.011	.273	.002	.000
自己受容	.98	.98	.104	.103	.104	.103	.104	.103	.104	.103
情緒的サポート(全体)	1	.747**	.509**	.304**	.304**	.304**	-.238**	.175*	.000	.000
情緒的サポート(配偶者)	.000	.000	.002	.004	.004	.004	.004	.004	.004	.004
情緒的サポート(家族)	.99	.99	.99	.99	.99	.99	.99	.99	.99	.99
情緒的サポート(友人)	1	.381**	.282**	-.238**	-.238**	-.238**	.241**	.000	.009	.004
具体的サポート(全体)	.000	.009	.004	.017	.017	.017	.017	.017	.017	.017
具体的サポート(友人)	.99	.98	.99	.98	.98	.98	.98	.98	.98	.98
自己効力感のなさ	1	.483**	-.129	.128*	.128*	.128*	.128*	.128*	.128*	.128*
自己受容	-.000	.000	.189	.237*	.237*	.237*	.237*	.237*	.237*	.237*
情緒的サポート(全体)	1	-.289**	.313**	.313**	.313**	.313**	.313**	.313**	.313**	.313**
情緒的サポート(配偶者)	.000	.000	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001	.001
情緒的サポート(家族)	1	.1	-.610**	-.610**	-.610**	-.610**	-.610**	-.610**	-.610**	-.610**
情緒的サポート(友人)	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000
具体的サポート(全体)	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000
具体的サポート(友人)	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.000

**p<.01, *p<.05

III-3 重回帰分析

親の養育態度尺度「応答性」、「統制」の各2因子を目的変数とし、他の2尺度10因子を説明変数とした重回帰分析の結果をTable 5~6に示す。

「応答性」には、「全体の情緒的サポート」が正の、「自己効力感のなさ」、「友人の具体的サポート」が負の関与をしている。

「統制」には、「自己効力感のなさ」、「自己受容」が負の関与をしている。

従って、全体的に情緒的サポートを受けていると感じ、自己効力感があり、友人から具体的サポートを受けていないほど、親の養育態度は応答的になりやすく、自己効力感があり、自己受容できていないほど、親の養育態度は統制的になりやすいといえる。

Table 5 応答性の重回帰分析

	β
情緒的サポート(全体)	.392**
自己効力感のなさ	-.294**
具体的サポート(友人)	-.209*
R^2	.202

**p<.01, *p<.05

Table 6 統制の重回帰分析

	β
自己効力感のなさ	-.506
自己受容	-.364
R^2	.146

**p<.01, **p<.05

自己評価尺度「自己効力感のなさ」、「自己受容」における各2因子を目的変数、他の2尺度10因子を説明変数とした重回帰分析の結果をTable 7~8に示す。

「自己効力感のなさ」には、「応答性」、「友人の具体的なサポート」、「統制」が負の関与をしている。

「自己受容」には、「全体の具体的なサポート」が正の関与をしている。

従って、応答性がなく、友人から具体的なサポートを受けず、統制していないと自己効力感が感じられず、全体の具体的なサポートを受けていると自己受容できるといえる。

Table 7 自己効力感のなさの重回帰分析

	β
応答性	-.271**
具体的サポート(友人)	-.295**
統制	-.271**
R^2	.226

* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$

Table 8 自己受容の重回帰分析

	β
具体的サポート(全体)	.333**
R^2	.102

* $p < 0.1$, ** $p < 0.05$

III-4 t検定

・家族の人数について4人以上の条件と、3人以下の条件に分けて各因子の平均値についてTable 9に示した。

家族の人数により差があるかどうかt検定を行ったところ、4人以上の方が「統制」においてのみ、3人より平均値が有意に高かった [t(99)=2.31, p<.05]。

Table 9 家族の人数についての平均値とSD

	3人以下		4人以上	
	N	平均値(SD)	N	平均値(SD)
統制	82	2.95(0.49)	19	3.22(0.34)
応答性	86	3.38(0.37)	19	3.30(0.27)
情緒的サポート(全体)	86	3.26(0.38)	19	3.25(0.47)
具体的サポート(全体)	86	2.88(0.41)	19	3.02(0.54)
情緒的サポート(配偶者)	86	3.17(0.52)	18	3.31(0.46)
具体的サポート(配偶者)	86	3.16(0.45)	18	3.23(0.49)
情緒的サポート(家族)	81	3.37(0.51)	18	3.31(0.47)
具体的サポート(家族)	81	3.33(0.56)	18	3.36(0.61)
情緒的サポート(友人)	86	3.24(0.46)	19	3.15(0.64)
具体的サポート(友人)	85	2.22(0.63)	19	2.41(0.84)
自己効力感のなさ	86	2.67(0.90)	19	2.38(0.69)
自己受容	85	3.31(0.70)	19	3.43(0.60)

・子どもの人数について1人の条件と、2人以上の条件に分けて各因子の平均値について差があるかTable10に示した。

子どもの人数についてt検定を行ったところ、1人の方が2人以上より、「応答性」の平均値が有意に高かった [t(90)=3.26, p<.05]。

子どもの人数についてt検定を行ったところ、1人の方が2人以上より、「全体の情緒的サポート」の平均値が有意に高かった [t(90)=2.44, p<.05]。

子どもの人数についてt検定を行ったところ、1人の方が2人以上より、「友人の情緒的サポート」の平均値が有意に高かった [t(90)=2.82, p<.05]。

Table10 こどもの人数についての平均値とSD

	1人		2人以上	
	N	平均値(SD)	N	平均値(SD)
応答性	59	3.48(0.35)	33	3.22(0.34)
情緒的サポート(全体)	59	3.34(0.60)	33	3.15(0.25)
情緒的サポート(友人)	59	3.35(0.36)	33	3.08(0.35)
統制	55	2.91(0.43)	33	3.07(0.36)
具体的サポート(全体)	59	2.96(0.46)	33	2.83(0.57)
情緒的サポート(配偶者)	58	3.25(0.45)	33	3.06(0.46)
具体的サポート(配偶者)	58	3.23(0.54)	33	3.08(0.41)
情緒的サポート(家族)	54	3.41(0.60)	33	3.31(0.48)
具体的サポート(家族)	54	3.40(0.45)	33	3.30(0.39)
情緒的サポート(友人)	58	2.28(0.65)	33	2.13(0.61)
自己効力感のなさ	59	2.74(0.98)	33	2.55(0.66)
自己受容	58	3.31(0.70)	33	3.32(0.68)

・大人の人数について3人以上の条件と、2人の条件に分けて各因子の平均値について差があるかTable11に示した。

大人の人数についてt検定を行ったところ、3人以上の方が2人より、「全体の情緒的サポート」の平均値が有意に高かった [t(102)=1.48, p<.05]。

大人の人数についてt検定を行ったところ、3人以上の方が2人より、「全体の具体的なサポート」の平均値が有意に高かった [t(102)=2.69, p<.05]。

大人の人数についてt検定を行ったところ、3人以上の方が2人より、「家族の具体的なサポート」の平均値が有意に高かった [t(96)=2.28, p<.05]。

Table11 大人の人数についての平均値とSD

	3人以上		2人	
	N	平均値(SD)	N	平均値(SD)
情緒的サポート(全体)	7	3.47(0.19)	97	3.25(0.40)
具体的サポート(全体)	7	3.33(0.27)	97	2.88(0.43)
具体的サポート(家族)	7	3.80(0.23)	91	3.30(0.57)
応答性	7	3.31(0.20)	97	3.34(0.37)
統制	7	3.31(0.49)	93	2.98(0.47)
情緒的サポート(配偶者)	6	3.53(0.28)	97	3.17(0.52)
具体的サポート(配偶者)	6	3.44(0.42)	97	3.16(0.46)
情緒的サポート(家族)	7	3.46(0.35)	91	3.34(0.51)
情緒的サポート(友人)	7	3.45(0.23)	97	3.20(0.50)
具体的サポート(友人)	7	2.49(0.76)	96	2.24(0.67)
自己効力感のなさ	7	2.63(0.60)	97	2.63(0.89)
自己受容	7	3.51(0.41)	96	3.32(0.70)

・出身地について和歌山県内からの条件と、他府県からの条件に分けて各因子の平均値について差があるかTable12に示した。

出身地が和歌山県か他府県かについてt検定を行ったところ、和歌山県内出身の方が他府県出身より、「友人の具体的なサポート」の平均値が有意に高かった [t(101)=2.08, p<.05]。

出身地が和歌山県内か他府県かについてt検定を行ったところ、他府県出身の方が和歌山県内出身より、自己効力感のなさの平均値が有意に高かった [t(102)=-2.22, p<.05]。

Table12 出身地が和歌山県内か他府県かについての平均値とSD

	和歌山県内		他府県	
	N	平均値(SD)	N	平均値(SD)
具体的サポート(友人)	72	2.35(0.68)	31	2.05(0.64)
自己効力感のなさ	72	2.50(0.84)	32	2.90(0.89)
応答性	72	3.35(0.35)	32	3.39(0.37)
統制	68	3.06(0.47)	32	2.89(0.49)
情緒的サポート(全体)	72	3.28(0.39)	32	3.24(0.36)
具体的サポート(全体)	72	2.95(0.44)	32	2.82(0.41)
情緒的サポート(配偶者)	71	3.20(0.49)	32	3.20(0.55)
具体的サポート(配偶者)	71	3.21(0.46)	32	3.10(0.44)
情緒的サポート(家族)	70	3.36(0.52)	28	3.41(0.41)
具体的サポート(家族)	70	3.33(0.58)	28	3.39(0.53)
情緒的サポート(友人)	72	3.28(0.46)	32	3.13(0.52)
自己受容	71	3.41(0.61)	32	3.13(0.82)

・生まれた時代について昭和生まれの条件と、平成生まれの条件に分けて各因子の平均値について差があるかTable13に示した。

生まれが昭和か平成かについてt検定を行ったところ、平成生まれの方が昭和生まれより、応答性の平均値が有意に高かった [t(99)=3.49, p<.05]。

生まれが昭和か平成かについてt検定を行ったところ、平成生まれの方が昭和生まれより、配偶者の情緒的サポートの平均値が有意に高かった [t(98)=2.23, p<.05]。

Table13 生まれた時代についての平均値とSD

	昭和		平成	
	N	平均値(SD)	N	平均値(SD)
応答性	81	3.31(0.33)	20	3.60(0.36)
情緒的サポート(配偶者)	80	3.13(0.52)	20	3.41(0.42)
統制	77	3.05(0.46)	20	2.86(0.50)
情緒的サポート(全体)	81	3.23(0.38)	20	3.36(0.40)
具体的サポート(全体)	81	2.88(0.45)	20	3.00(0.31)
具体的サポート(配偶者)	80	3.13(0.43)	20	3.27(0.54)
情緒的サポート(家族)	76	3.37(0.45)	19	3.41(0.51)
具体的サポート(家族)	76	3.33(0.54)	19	3.42(0.52)
情緒的サポート(友達)	81	3.19(0.50)	20	3.28(0.47)
具体的サポート(友達)	81	2.22(0.72)	19	2.36(0.42)
自己効力感のなさ	81	2.61(0.76)	20	2.54(1.10)
自己受容	81	3.35(0.59)	19	3.23(0.94)

IV. 考察

相関係数から、「応答性」には、全ての情緒的サポートが影響している。「統制」には影響していないことから、人からサポートされていると応答的な対応ができるが、サポートのない人は、統制的な比較的閉じられた子育てということがうかがえた。

このことから、「応答性」の高い母親は、こどもとの愛着形成が結びやすく、「統制」の高い母親は、こどもとの関係性に課題をもつ可能性が示唆された。

「応答性」には、「配偶者と家族からの全てのサポート」が影響していたが、「友達からのサポートは情緒的なサポート」しか影響していない。

重回帰分析からは、サポートの側からは、「情緒的なサポート」が、「応答性」の態度を促進する、「友達からの具体的なサポート」は、「応答性」の対応を妨げることが指摘できる。

全体の具体的サポートは、親の自己受容感を高めるが、自己効力感のある人は、「応答性」と「統制」を高め、自己受容できない人は、「統制」だけを高める。親の自己受容が低ければ、子育てに悪い影響を与えると想定される。

自己評価に影響を与えている要因として、友達の具体的サポートが、自己効力感を高め、全体の具体的サポートが、自己受容感を高めている。

このように、具体的サポートは親の自己評価を上げるが、こどもへの応答性を低め、間接的に統制を高めている。具体的サポートは、親の自己評価にはいい影響を与えるが、子育てそのものには、決していい影響を与えない。この対親・対こどもで相反する効果を意識した子育て支援が必要であるといえる。

親の子育て支援には、自己受容感と自己効力感両方を高める支援と情緒的なサポートが必要だろう。「情緒的なサポート」は、直接親の養育態度を応答的に変えることができ、「具体的なサポート」は自己評価を上げるだけである。

これまで行ってきた支援の方法は、親の養育態度を改善するために、「具体的なサポート」を提供することが多かった。しかし、一般的にありがちな支援は逆であり、「具体的なサポート」によって親の養育態度が改善するという考え方は、実は、間違いであるということが分かった。

問題と目的で取り上げた事例のように、具体的に何かアドバイスをするだけでなく、あとから共感的な言葉かけや、母親の気持ちを聞く支援をしていくことが、子育て支援には、より有効だと言えるのではないかと考えられる。

「和歌山で生まれ育ち、家庭をもった母親と、他府県から嫁ぐ、または引っ越しをしてきた母親では、人的環境も含む環境要因が影響するのではないか」という仮説は、t検定の結果から、和歌山県内出身の人は、友人からのサポートに関連が見られ、他府県から来た人は、「自己効力感のなさ」に負の関連が認められた。本調査では、和歌山県内出身者が多かった。

和歌山も含め、比較的田舎の地域では、お互いの家の中のことまで知っていたり、声掛けやおすそ分けなど、お互いさまの気持ちで助け合って生活をしているところが少なくないため、その地域で育つこどもたちには、自ずとその精神が育まれていると考えた。

そのため、友人からのサポートを受けたり、連帯感を感じて安心できることが、和歌山県内出身者の傾向として強いのではないかと推測される。

他府県から嫁いで来た場合、出産は里帰り出産をする人も多く、新生児を迎え自宅に戻っても、すぐに友達ができることもなく孤立しがちである。

しかしその反動で、子育てをしている人が集まるような場に仲間を求めて入っていき、そこでの新たな関係性をつむいでいく中で自己効力感も上がるのではないかと考えられる。

「同年代のこどもをもつ母親が、昭和生まれと平成生まれでは、養育態度に差があるのではないか」という仮説は、t検定の結果から、平成生まれの方が、「応答性」と、「配偶者からの情緒的サポート」に関連が認められた。年齢が高い母親ということで、年齢が低い母親に比べ、子どもが複数人いることも多く、「応答性」が低くなるのではないかと考えられる (Table10・13参照)。

未就園児を育てている母親たちにとって、どのようなサポートが、自身の子育てによりよく影響しているかについては、「情緒的サポート」が「応答性」に影響していたが、「具体的サポート」は、人によって違うことが分かった。

また、サポートを受けられる人で、且つ、自分できると思う人の「応答性」が高かった。

問題と目的で取り上げた、「祖父母からの育児への援助があるのとないのとでは、子育ての負担感や孤立感が減ったり、養育態度にもよい影響が出るように思わ

れるが、一方で、母親は、祖父母と関わりが増えると、自身の思うよう子育てができず、ストレスを感じたり、自分を否定的に捉えてしまうこともあるのではないかと推測したことは、t検定のTable 9にあるように、家族が多いほど、「統制」と関連があると認められた。

これは、祖父母世代が、子育てに関わることで、「統制」が利いてくるパターンと、祖父母世代の評価を気にして親世代が「統制」してしまうという2方向の統制パターンが考えられた。

V. まとめ

本研究から、今まで、目に見えている部分でのサポートが、母親に一番有効だと思っていたが、そうではないことが分かった。実際は、話を聞いてもらったり、一緒に喜んだり、共感するサポートを受けたかっただろう母親はたくさんいただろうが、現実的には、目に見えるところでの困り感の解消が優先してしまい、有効なサポートはできていなかったのではないかと。

人は、家庭をもち、配偶者と生活する中で葛藤が生まれ、新たな一面を発見し、相互的に配偶者との生活を受容していくことから始まり、いつか新しい家族を迎えた時、そこでまた価値観の違いや、子育て観の違いが生まれ、様々な壁に突き当たることが多いが、サポートを受ける側も、何をどうしてほしいのか、また、そうしてもらった時には、どう思ったのかを明確に相手に伝えると、望ましいサポートが継続される。

米澤(2015)は、「正の感情、快感は足し算されず、負の感情、不快感情は足されてしまう」と述べている。ならば、うまくサポートを受けられなかった場合、自分自身が、もっと具体的に、「こんな時は、こうしてほしい」、「今、こうしてほしい」など、相手に伝えることで、足される負の感情、不快感情は、減らせるのではないかと考えた。

褒められたら嬉しく、またやろうという気持ちになるのは、子どもだけでなく大人にも共通のことが言える。そういうサイクルがうまく機能していけば、少なくとも、家庭内では、協働して子育てを行うことができる。

子どもが成長するにつれて、乳幼児健診や支援センターなどで、様々な人と知り合い、母親の世界も広がる中で、自分一人で子育てを抱えている母親と、周りの人からのサポートをうまく受けて子育てをしている母親では、「応答性」に差が出ているように思われる。

核家族化、晩婚化、少子化等、さまざまな問題を孕みながら時代が進む中で、なんでも一人で抱えてしまう母の心にどう寄り添い、必要に応じた支援を届けられるかは、誠実に向き合い、母親にとってのキーパーソンとなり、丁寧に信頼関係を築くことにあるといえる。

私生活においても、自身の子育てで笑顔の影響の大

きさを身をもって感じる人が多い。

とりわけ、小さな子どもの近くにいる人には、笑顔でいてほしいと願う。

母親として、実際の子育てには、笑顔でいられないこともしばしばある。

しかし、それを笑顔に近づけられるような関わりを本研究を通じて得た母親の傾向を元に、今後の子育て支援や仕事に活かしていくべきだと思われる。

引用文献

- 荒牧美佐子 2005 育児への否定的・肯定的感情とソーシャル・サポートとの関連—ひとり親・ふたり親の比較から— 小児保健研究, 第64巻, 6号, 743-744.
- 安藤智子・荒牧美佐子・岩藤裕美・丹羽さかの・砂上史子・堀越紀香 2008 幼稚園児の母親の育児感情と抑うつ—子育て支援利用との関係— 保育学研究, 第46巻, 第2号, 106.
- 厚生労働省 2017 平成27年度福祉行政報告例の概況.
- 厚生労働省 2018 人口動態調査.
- 内閣府政府統括官 2014 家族と地域における子育てに関する意識調査報告〔概要版〕.
- 田邊恭子・米澤好史 2009 母親の子育て観からみた母子の愛着形成と世代間伝達—母親像に着目した子育て支援への提案— 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要, No.19, 19-28.
- 堤明純・萱場一則・石川鎮清・菊尾七臣・松尾仁司・詫摩衆三 2000 Jichi Medical School ソーシャルサポートスケール (JMS-SSS) 改訂と妥当性・信頼性の検討 第47巻 日本公衛誌 第10号, 866-878.
- 野村知二 2003 児童虐待リスクアセスメントと「子育て」の変容, 京都大学 生涯教育学・図書館情報学研究 vol.2, 71.
- 米澤好史 2015 発達障害・愛着障害 現場で正しく子どもを理解し、子どもに合った支援をする「愛着の器」モデルに基づく愛着修復プログラム 福村出版.

参考文献

- 阿部範子 2007 母親のライフスタイルおよび充実感と育児不安の関係 日本赤十字秋田短期大学紀要, 第12号, 1-6.
- 荒牧美佐子・無藤隆 2008 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に発達心理学研究, 第19巻, 第2号, 87-97.
- 加藤孝士・永井知子・小川佳代・富田喜代子・中岡泰子 2015 子育て支援センターを利用する母親のリフレッシュと育児ストレスについて—リフレッシュ行動と効果期待のどちらが育児ストレスを予測しうるのか—, 四国大学紀要, (A), 45, 9-19.
- 川崎道子・宮地文子・佐々木明子 2008 研究ノート 育児不安・育児ストレスの測定尺度開発に関する文献検討(1983年~2007年) 沖縄県立看護大学紀要, 第9号, 53-59.
- 住田正樹・中田周作 1999 父親の育児態度と母親の育児不安 九州大学大学院教育学研究紀要, 第2号(通巻第45集).
- 中道圭人・中澤潤 2003 父親・母親の養育態度と幼児の攻撃行動との関連 千葉大学教育学部研究紀要, 第51巻, 173-179.
- 吉田弘道・山中龍宏・巷野悟郎・太田百合子・山口規容子・牛島廣治 2014 育児不安尺度の作成に関する研究—因子間相関について— 専修人間科学論集 心理学, Vol.4, NO.1, 39-44.

謝辞

本研究に調査のご協力をいただいた方々に厚く御礼申し上げます。